

---

# 私は、お嬢様ですのよっ！！！

ゆながりか

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

私は、お嬢様ですのよっ！！！

### 【Zコード】

Z6891J

### 【作者名】

ゆながりか

### 【あらすじ】

わたくしあやのじゅじょは  
私、綾小路琴葉は、お嬢様です。それなのに……執事達は、私に逆らってばかり。

一人は、見かけクールで中身どM。

一人は、見かけ甘系で中身どS。

私のお嬢様ライフ、どうなっちゃうのぉおー？

# -プロローグ- 最低な日

「おまえもまたうりやうで。

今田に限つて

高杉が、いない。

よつにもよつて。

今田に限つて

ア、イ、ツ、が、い、る、。

「で？おまえは、何で俺から遠ざかってるわけ？」

「つな……つ！ ベ、別に、遠ざかつてなんか……」

「じゃあ、何でその足は後ろに下がってるの？」

「……おれが……」

そういうえば、今日やつてたつけ？

## 星座占い 十二位 ふたご座

信じてなんていなかつたけど……確かに、最悪な日かも。

「お、おしおれつて……つ……わ、私は、お嬢様ですかねおね  
ねたくじ

「そういうの、今、関係ないでしょ……。先輩もいないし……。それに、先輩だって、好き勝手にしてるじゃん？」

今日は高杉はお休み。

「高杉は、好き勝手になんて、してない、し……つー?」

背中に、壁が当たる。

「 二三〇〇年、我國では二、三〇〇年、

視線を壁にやつた瞬間、一いつは私の目の前にやつてきた。

「が、我慢して

「そういうカワイイ顔しないでくれる、お嬢様……」

卷之三

耳元でささやかれて、頭がクラクラ……。

つていうか、私が耳弱いの知つてゐるよねええ――――――

「馬鹿とは失礼な。これでも、頭を使って、お嬢様とイチャつく作戦を練つていたのに」

その一言が余計なんだよおおおーーー  
顔が真っ赤になるのがわかる…………つ

もう、ここでは……どうなのー。

「そうだ、きちんと名前で呼んでくださいね、お嬢様」

「……畠中。せつせと仕事に戻つて！ それと、私も名前で呼んだんだから、畠中も名前で呼んでつ」

「…………わかりましたよ、  
琴葉お嬢様？」

……上出来じやないか。



## 第一章 最低な出会い

アイツとの出会いには、最悪最低……だった。  
だって、こきなつ会つて最初の一言が、これ。

「おまえ、胸小さ……」

しかも、耳元でささやかれて。  
その言葉に、かなりムカつとくる。

「何ですううえええ！誰が小さいよ！私だって、Bカップくらいは  
あつま……」

と、ついつい道端で叫んでいた。  
だって、ムカついたし。  
でも、アイツは……それを、横田で笑つていた……。  
最低……。

その後、アイツは高杉のところでもいたずら。

「何だとおおおー！誰が趣味悪いじやあー！」

普段は全く怒らない高杉が、珍しく怒っている。  
こわつ！

「わてと、あこせつはこれくらこにしておこて……」

何があこせつじや！

だいたい、もつとマシなあこせつはないのかつ！

「俺の名前は、あまなやかつき雨露翠円。今日からこゝ、綾小路家の執事となつたよしへく」

……？

高杉と顔を見合せた。

どういづ、こど……？

我が綾小路家は、先祖代々伝わるお金持おねがひ。  
そこで生まれた長女が、私、綾小路琴葉あやのとうじは。

私は、由緒代々伝わる綾小路家の誇りをもつて今まで生きてきた。  
だから、表はとっても柄の良いお嬢様。

でも……

学園で毎日笑つて過ぐすのつて、大変なんだよねえ……。  
それで、私のストレス発散が、高杉イジリ。

勘違いしないでね、いじめじやなくて、イジリだからね。

「お嬢様、こやつを追い払いましょうか」

「ええ、よしへく頼むわ、高杉」

「かしこまりました。ですが、もちろん今日の午後は……」

「わかつてゐるわよ、精一杯イジッてやるから、安心しなきこ」

わかると思つけど、高杉はつむの執事。  
超一流の執事。

なんだけど……

「こいつは……超ぞ級の、どこの……！見かけ、黒髪にめがねといつ、普通はいつと間違えられぬが、中身はM。つていうか、ある意味病氣かも……。

「お引取り願います。綾小路家では、新しい執事を雇つ予定は到底ありませんので……」

「あつらあーパパアン、もう新人さんが来たわよお

「こつやあんーママアン、本当かい？」

……聞いてるだけで腹立たしいわ……つ  
これ、家のママとパパ。  
聞いてるとわかるだろ？ けど、超能天氣な一人です。

「琴葉、パパアンとママは、世界一周旅行についてくるからね」

……はつ？

せ、世界、一周うううー！？

「どつこつ」とですの、お父様、お母様

「つ・ま・り ママンと僕は、僕の世界一周コンサートに行くんだよーそこで旅行に行く間、一人じゃ不便かもしけないから、この、

「雨宮暁児君を呼んだのさ」

.....。

ええ~~~~つづつ~~~~? ? ?

こ、こいつ、本当にうちの執事になるの~!?

つていうか、パパもママもいなくなるの!?

私とこの二人!?

は、はあ、はあ.....「!~?」を使いすぎて疲れた.....。

「つづつわけで。よろしくな、琴葉お嬢様」

.....」の世話、地獄なり.....。

## 第一章 最低な出会い（後書き）

スマセン、この前は切羽詰つていて、ご挨拶が遅れてしまつて…

私がゆながりかです！

はじめまして…の方もいるよね？？？

し！の作者です。

って、自己紹介はこれくらいですね。

今回、このお話を書くにあたっては、つぶつぶ、堅苦しいな。

「お嬢様、お嬢様」とお嬢様の言葉は、

まあ、一度は書いてみたかったと、Mの方法ですね、青春!!!!

私も、お嬢様生活を送つてみたいのです……まあ、うちはお嬢様じや

ないからしようがないんですけどね。

ともかく、こんな作者ですが、どうぞよろしくとこいつ」とです。  
それと、今まだ「王子様を求めて。」の方が終わっていないので、  
おそらくこいつちは一週間に一回くらいのペースで更新予定です。  
よかつたら、「王子様を求めて。」も、見てみてくださいね  
あつちは、毎日更新予定なので。

それでは、まだどうかでお会いしましょウー！

by ゆながりか + \*

## 第一章 まさかのまさか、一人きつ…。

「お嬢様、明日はお暇をもうこたいのですが

「あら、高杉。珍しいわね」

「ええ。実家の母親が、急に熱を出したらしく。また、明日は綾小路家の使用人を全員お休みにしようとされています。一年に一度の大休日というわけですが……」

「よろしくじよ。今日からでもいいわ。今日と明日、いつできなさい」

「……ありがとうございます」

綾小路家に使える高杉雷雨たかすぎらいづは、前に言つたとおり、ども。そのことは、私と雷雨以外は知らない……はずだった。

「ところで、お嬢様。今日も、どうしてくださ……」

バツシイイイーン……

ビンタの音が、部屋中に響き渡る。

「あつがとうござります、おじよみ……」

「へえ…。先輩は、Mなんですか。それも、超ビ級の。人は、見かけによりませんね~」

いやあな声が聞こえた。

この声って、まさか…

「雨宮。なぜここにいるんですの?」

なるべく礼儀正しい言葉で返す。

この声は、我が家の新しい執事、雨宮皇門。

最低最悪のビリである。

「まあ、情報ゲット、かな?」

「……。今すぐここから立ち去つたさい。今日と明日は、休みにするのですわ。ですから、今すぐこの屋敷から出て行ってください。」

ヤバイ。

このことは、誰にも知られてはならないんだから。

ここ、綾小路家に仕える執事が、どMだなんて。

こんな事が世にしれたら、マズイ。

かなり、ね。

「無理だね~。その間、お嬢様一人なんでしょう?俺が面倒見てやるよ」

カチン。

なによ、その言葉使いは!

それが私に対する態度!?

「雨宮。お嬢様に対する態度を改めなさい」

私が言う前に、高杉がフォローしてくれる。  
そうよ、なんでそんなため口なのよ！

「はーい、先輩。でもさー、先輩も、大変ですよねー。こおーんな  
お嬢様に雇われるなんて。それに、この人にどつかれるなんてー、  
かわいそー。俺がどつきましょうかー？あ、でもー、お嬢様にどつ  
かれたいのかなー？なんでー？それってえ、まさかあー」

「ちょっ、高杉？」

確實に高杉の肩が震えている。

な、なんで？

「それ以上言うと、即刻クビですよ」

ふるえる声で言つ高杉。

そうだそつだー、クビだ！

「あつれー？でもさー、俺つてば、ご主人様に雇われたからー。クビ  
つて、無理かもー。ですね」

「ムツカー。

ムカつくんですけど、この最低執事。

「ちょっと、高杉ー何か言つてやりなさ……」

「お嬢様、それでは。使用人達には、言つておきますので」

えつー？

ちょ、ちょつと、高杉、どこに行くのよ！

この最低最悪の執事を連れて行きなさいよおおお！

「あれ、先輩、逃げちゃいましたねー。つてことはあ、今日と明日は、お嬢様と俺、二人きりかなー」

顔から血の気がひいていくのがわかる。  
ちょつ、ちょつと待て。

それって、ヤバくないか？

こんな奴と、一人きり？？

いやあああー！！！

「……雨宮、私を一人にさせて」

「えーっ。つまんねー」

「なら、皿洗いでもして。使用人がいなんですかの」

「はあーい……でもさー」

「何よ、このどじの執事……つーつて……何で近寄ってきてるのよおおお！」

プロローグへと続く。



## 第三章 真剣なアイツ。

「お嬢様？昼食のお時間です」

「……。今日は、一人でつ。食べるから」

「へえ～。この状態でも、そんなことが言えるんですね、琴葉お嬢様は」

「う、うう～……。

状況最悪。

この、悪魔が！

今の状況を整理してみると……  
雨宮に、抱きかかえられている。  
しかも、お姫様抱っこで。  
以上……。

は、早くおひしなせ……！

「ちよつ、雨宮。命令よ、おひしな、とい」

「さうですね～。キス、してくれたら、下りてしましょうか？」

なつ……！

何を、言つてゐるのよ、このSが！

最低……つ

「やんなこと、できるわけないでしょおおおー。」

お嬢様言葉を使つのも忘れて、叫んでしまつた。  
や、ヤバッ！

「こ、今は、ナシ、ですわー。」

「じ、じうなつたぢ……

ジタバタともがくのも無駄な抵抗だと感じた私は、面倒を睨みつけ  
る。

も、もひ、こんな状況我慢できないんだからつ

「あ、キス、するわよっ」

「へえ。じゃ、お願ひしますよ。」

「う、うさり、う

顔を、ギリギリまで近づかれて、体がピクシと反応する。  
やだやだ、どうしてこんな反応してんのよー！

び、ビうあれば、いの？？？

「せ、つぱつ、やめたーーー！」

「ふへへああいこでしゅう。かわいい顔が拝見できたことですしね  
」

なつー

顔が真っ赤になつてゐるのがわかる。

田の前にいる悪魔が、「ヤリと笑つた。  
へへ、またしても！――！

「それでは、昼食の準備をしてまひります」

そう言つて、雨宮が出て行つた瞬間、肩の力が抜けるのがわかる。  
ふうへ……つ

も、もう、疲れる……。

「ああ～、もう～ーあの、ビビの野めがー」

今度来たら、追い返してやるんだからー

へ、変な行動をとつたら、パパやママ言つて、クビにしてやるー

あ……。

そうだ、クビにすればいいんじやないか。

つていうか、その話題を持け出せば……私の言つことを聞いてくれるかもー

「ちょっと、雨宮ー」

「何でしちよつか、お嬢様」

「今後、私に逆らつたらクビにするんだからねーわかってるの？」

「……」

やつた、勝つた！

雨宮が黙つた瞬間、そう感じた。

だって、何も言い返してこないし。  
これって、負けを認めるってことでしょう？

「……お嬢様は、本当にそれでも平氣なのですか？」

え……？  
何言つて……

雨宮を見た瞬間、その真剣なまなざしさ、なぜかドキッとするのがわかつた。

やだ、何ときめこっちゃつてるのよ。

「……お嬢様の判断にお任せします」

バタン。

いつもなら、無理矢理でも、一緒に食事をすること。  
今日は、なぜか。

一人ぼっちの、食事。

それが、こんなにも寂しいなんて。  
初めての、感覚だった。

雨宮、私は、どうすればいいのよ。



「… もお～～～～～… どうして、アイツの事がこんなに気になるの～？」

あー、もう！

だって、アイツには、あんな意味深なことを言ってから出て行く  
し。

それに……

あんな顔されたら、嫌でも気になる……。

「ああーっ！ もう、こんな考えはやめー。直接聞きに行けばいいだけですわー。」

፭፻፲፭

ご主人様からのご命令なんだから、アイツも逆らえないはず。

で、雨宮はどう？？？

えこと  
皿洗い?

## 洗濯？

アイツが、マジメに洗濯をやるとは思えない。

「雨宮？」

広い屋敷の中を一人で探索。  
ううへ……。

暗い！－！

暗い、暗すぎるよ－－！

べ、別に、暗いのは怖くない。

そう、お化けなんて信じない主義だもん！

ガタガタ……ガタン。

……。

顔から血の気がひいていく私。

やだ、何でドアが勝手に開いているの？

ま、まさか、お化け？

「おじょ～れま～？

「…………」

「…………！」

あ……。

田の前にいるのは、幽霊。

「驚かさないでくだれる？..」

「なあ～んだ、怖くないの？」

「もちろんですわ！」

そう、この綾小路家の長女の私（といふか、一人っ子）が、お化けなどといふものを怖がるはずが……

ギギギギ～。

o

「あ、畠宮？驚かそりとしても無駄ですよ？」

「……俺、ここにいるんですけど

○

体の震えが止まらない。

ちやくちや怖いんだから！

「は、早く行くわよ、雨宮！」

「…………もしかして、お嬢様、怖いの？」

○

バレた？

探るよつたな雨宮の皿が、どうぞどう一や一やと繰へなつてこく。

「やだな、お嬢様。最初からそう言つてくれればよかつたのに。」  
さ、探検しましょーか

「いやあ～……む、無理無理無理……！」、怖いし……」

「それがいいんじゃないですか。お嬢様がこんなに怖がるなんて」

「……い、いの、どうがああ～……」

私の怒鳴り声は、屋敷を轟き渡った。  
ああ～、最低！……

「おもしろかったですね、お嬢様」

「う、うう……」

「……泣いてる?」

「そ、そんなわけないでしょつ……」

「で、ビームでいれば気が済むのよ……。  
探検が終わっても、私の震えは止まらない。  
だ、だつて、怖いし……。」

「で、本題。お嬢様は、どうして俺を追いかけてきたの?」

「うつ……そ、それは……」

「いきなり、そんな真剣な顔で見ないでよ。  
ただでさえ綺麗な顔が、私を真っ直ぐに見ていのつて思つと……。  
やだ、変な気分。」

「俺のこと、悩んでいたり?」

「う

「俺が言った言葉、気にしてたり?」

「う

「実は、俺がいなくなつたらと、寂しかつたりして?」

「……べ、別に」

やだやだ、私が考えていた事とピッタリなんて言えないし。  
つていうか、どうしてこんなにカンがいいのよつ！

「別に、ちょっとこなくなつた時を想像して、悲しくなつたり、さ  
つきの言葉で、悩んでたり、つていうか、第一、アンタのことを考  
えるとか、そういうの、全然してないから！」

「……考えてたんだ、俺の事」

あ……。

ああー、私の馬鹿馬鹿馬鹿……！  
素直じやないのこ、素直になつてねよー。  
もつ、嫌ー……！

「お嬢様が考えてくれたつてだけで、すりいじりおじこよ」

え……。

何、そのまなざし……。

つていうか、優しすぎるよー……！

「ま、本当はそれ以上を望むやうね」

……馬鹿執事！

それでも、少しほ……

気になつた、のかも。



- ハピローグ - (後書き)

うう～ん、不思議な終わり方かも。  
ま、いつか  
とにかく、こんな終わり方も、ありかな

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n6891j/>

---

私は、お嬢様ですのよっ！！！

2010年10月11日01時15分発行